

# 破壊者ウルトラマン

大江健三郎

一九五四年（昭和二九）三月に七ヶ浜水域で水爆実験が行われ、八月に原水爆禁止署名運動全国協議会が結成され、同じ年の十一月に最初の怪獣映画「ゴジラ」が封切られた。

① 子どものための文学・映画・劇が、大人によってどのように造られるか？ そこに  
② は単純な構造の、「a」 複雑な課題がこめられている。それは子どもの目  
・意識が受け取るべきものを、大人の目・意識によって造るものであるからだ。子ども  
もと大人との間の、互いに排除し合う境界線がはつきりしないような、「子ども大  
人」あるいは「大人子ども」の幻的人格が造ったものには、どこかいかかわしいところ  
ろがある。子どもの想像力を解放する作品は、自立している大人の想像力によって造  
り出されねばならない。③ それは単純な原則である。「b」 大人になるこ  
とは、子どもであることの否定に立っているのであるから、「c」 大人が  
子どもに仮装してみることでは何も解決しないのであるから、ことは複雑になる。子  
どもの想像力は、大人の想像力とつながった同一地平にあるものなのだろうか？

④ 子どものために造られた作品はどのような種類のものであれ、多かれ少なかれ、この単純な構造の複雑な課題を反映している。  
われわれ大人がそれを見る時、子どものために造られた作品のうちこの二重性が契機となって、かえって大人のための作品にお



いてより現代そのものが鋭くかいま見えることでもある。現代とは、大人の想像力が、子どもの想像力に向けて、<sup>⑤</sup>こういう世界こそを示したいと願う時代なのか。現代とは、大人の想像力から子どもがこういう世界を提示されて、それを自分の想像力になんとか受け入れねばならぬ時代なのか。その感慨はしばしば、この時代を唯一の同時代として生きるわれわれに、<sup>⑥</sup>おごたらしいほどの明らかさでほかならぬわれわれ自身を凝視させずにおかない。

**3** 現在わが国の子どもたちの文化を最も高度に支配している「造られた世界」とはなんだろうか？ <sup>⑦</sup>それはあらためていう必要もないほど明白に、テレビの、いわゆる怪獣映画の世界である。少なくとも戦後の子どもたちの文化の領域で、怪獣映画ほど永く広範囲に、<sup>⑧</sup>そこを支配し続けたものはなかった。毎週それも毎日のように、わが国の子どもたちがテレビの怪獣映画を見まもつて過ごす時間の総量を集計してみれば、それは驚くべき数値に達するだろう。むしろ怪獣映画と無関係に幼・少年期を過ごす日本人がいまや全くまれてあるといわなければならないほどだ。「d」子どもたちは、なかなか怪獣映画を「卒業」しない。われわれは日本人の幼・少年時の意識と感受性のまことに大きい部分を（全体を、でないことが心から希望されるが）怪獣映画にさげていることになる。

**4** 怪獣映画は、いうまでもなく大人の日本人によつて「造られた世界」である。想像力にかかわっている以上、この「造られた世界」のそのすべての領域が、大人の意識によつてコントロールされ尽くしているというわけにはゆかない。もしかしたら、その根本のモチーフすらもが、<sup>⑨</sup>当の「造られた世界」を造る大人によつて確実に意識化されていないのであるかもしれない。なぜあなたは怪獣映画を造っているのか？ いやそれは子どもたちが望むからだ、という答えのみが返ってくることは大いにあるだろう。最も根本にあるものが、子どもに肩代わりさせられているわけだ。「e」子どもがいかに怪獣映画に熱中していても、君はなぜ怪獣映画に夢中なのか？ と問うて、十分な答えが返ってくるとは思えない。それはやはりこの「造られた世界」が、受け取る側にとつても想像力にかかわっているからである。

**5** そこで本質的な意味づけはあいまいまま、怪獣映画を造る大人たちがおり、それに熱狂する<sup>ぼうだい</sup>膨大な数の消費者群がおり、テレビ



待つ人間たち……

8

現にこの一九七〇年代に生きている日本人にとつて、真の怪獣、核兵器の存在は巨大に圧倒的に確実であるのに、現実生活においてわれわれにウルトラマンもミラーマンも実在していないことは確かなのだから、怪獣映画という「造られた世界」において、あのようにも暴力において大きい怪獣を造り出さざるをえない人間の、想像力の基底にある暗さ・悲惨さは、<sup>⑬</sup>それを見すごすわけにゆかない。テレビの前では、大いなる恐怖に続く豊かな安堵のカタルシスを味わう子どもたちも、もし彼らが正当に核兵器の脅威について教育を受けるなら、自分たちが<sup>⑭</sup>そのような奇怪なものにウルトラマンなしで（！）対峙しているのだということを、認める目をもたないわけにはゆかぬだろう。逆にいえば、そのような現実的対応物が、この世界にのしかかっているからこそ、地球破壊・人類滅亡の危機の具体化である怪獣の繰り返される出現が、この「造られた世界」を造る大人たちに、<sup>⑮</sup>それをテレビの前で待ち受ける子どもたちにも、たとえ想像力的であるアクチュアリティであれ、深く強くその現実感をもつのではないであろうか？ 核兵器による恐怖の均衡の時が始まる前に、どうして子どもたちのための文化の世界に、毎週しかも毎日のように、地球の全面的破壊の危機が繰り返し描き出されることがありえただろう。

9

いうまでもなく怪獣映画は、怪獣群のみによつて成り立っているのではない。彼らの暴力的侵略から地球を守り、人類を救うウルトラマンやミラーマンの活躍が、実際のカタルシスの根幹を構成する。怪獣たちが、恐るべきエネルギー量を蓄え、およそ動物的限界を超えた、全地球上の鱈の力の総和にも当たるような体力をそなえてすらいるにもかわらず、ほとんど常に実在の動物（あるいは想像された前世紀の動物）を思わせるところも（たとえばコブコブのしっぽを）残しているのは、だれも見知っていることであろう。「h  
」、彼らと闘うウルトラマン・ミラーマンのたぐいは、「i  
」人間の形をしていても、「j



「怪獣の逆に、全く哺乳類くささのないのが通例である。彼らは科学のにおいをたてている。科学者（または神のような超科学者）によつて造られた純然たるロボットであることでもあるし、同じ科学的処理を経た改造人間である場合も多い。アンドロメダ星雲からやってきた使節であるというような場合も、<sup>⑮</sup>そのもともとの宇宙的故郷は、<sup>⑰</sup>それ全体が科学工場であるような徹底して科学的な惑星として想定されているのである。彼らはみな体内に、超大型の原子力潜水艦でも装備しきれぬほどの機械的能力をひそめており、一様にロボットめいた機械的な身のこなしにおいてエネルギーを発する。

## 10

彼らウルトラマン・ミラーマンたちこそは、ありとある科学の精とでもいうべき巨人たちとして想定されているのである。<sup>⑱</sup>そこで問題が生じることになるであろう。たとえば核兵器という、科学の典型について同じ問題を類推してみれば、<sup>⑲</sup>こういふことになるにちがいない。「k

」、科学の精、核兵器には二つの側面がある。それは大破壊力において科学の威力を示している。<sup>⑳</sup>かつそれが人間の頭上にもたらす悲惨の大きさをも、この科学の精はあらわしている。「l

」科学としての医学は、同じ現代科学のもたらしたこの人間的悲惨と闘う力をなお十全にはもたえていない。<sup>㉑</sup>そこからあらためてウルトラマン・ミラーマンの場合にかえる時、問題はいかにも明瞭に見えてくるだろう。

## 11

怪獣映画の超人スターたちは、もつぱら科学の威力を示威するだけの存在である。彼らは科学のもたらす人間的悲惨と全く無関係な超能力として、空をかけり地にもぐり、怪獣どもを撃滅する。ドラマの展開のうえで彼らの超威力の出現する前に、まず一般の人間たちの無力が常に誇示されることも忘れてはならぬだろう。怪獣に対して、一般の市民は、あるいは人民は全く無力だ。彼らは自分の生活圏を不当に踏みにし

られて、嘆きつつ怪獣を見上げるのみである。特別任務を帯びた準科学的集団が、しばしば自衛隊の機動力とともに、怪獣と闘う。



⑫

それが人間による努力の限界をあらわすものとしてまず描き出されるのが、怪獣映画の一般式である。その反撃力だけで、たとえば大都市における「治安出動」には十分すぎるほどであらうと思わせる規模の、「m」については怪獣に対して無力な人間による作戦が終わって、攻撃の専門家たちもまた無力感に陥る時、宇宙の果てから、地球の端から、ウルトラマンが、ミラーマンがやってくる……

12

人間の側から、これら超人間科学スターと独自の関係を問うのが、ほとんどいかなる怪獣映画の場合にも、優等生の子どもとまことに人格高潔な科学者である。「n」は、その逆に怪獣どもどひそかな連絡をとっている悪人集団には、たいいてい気ちがい科学者がいる。地球上の人間にその責任のある科学の悪、科学のもたらす人間的悲惨は、すべてこの気ちがい科学者にひっかぶせられる。それが科学の悪であり、科学のもたらした人間的悲惨である以上、超人間科学スターたるウルトラマンたちに人間の側で連なっている善良、高潔な科学者のほうにもまた連帯責任があるのではないか、という疑いは、その怪獣映画に熱中している子ども達の想像力に向けてみじんもほのめかされることはない。もしそれを疑う子どもがいたとしても、なにほどのことであろう？

⑬

人格高潔な科学者にしてからが、結局ウルトラマンの大活躍のあと地球が滅亡の危機を免れれば、あらためて宇宙へ向けて飛び帰るウルトラマンを、ただおとなしく見送るだけの存在ではないか。人間のやることにたいしたことはないのである……

13

ウルトラマンやミラーマンの、超人間科学スターの無私的活動によつて（彼らは名誉も報償も求めぬばかりか、地球で燃料を補給することすらまれである）ブラウン管の前の子どもたちに与えられる第一の印象は、正義としての科学の威力ということであるにちがいない。科学の絶対的な威力が地球を滅亡から救い、人類に未来を与えると、その全面的な正義の保障であるにちがいない。どのような子ども達の想像力が、ウルトラマンによる科学の威力の後ろに背中合わせになっている科学の悪、科学のもたらす人間的悲惨に向けて発展してゆきえるだろうか？

14

もともととぼくが初めに怪獣映画へと関心をひかれたのは、単純な視覚的動機によつていた。ほとんど常にそれらの番組では、怪獣とウルトラマンたちとの格闘によつて、都市が破壊される。実際、東京は幾たび破壊し尽くされたことだろう。

15 時に怪獣の進入路である東京港近辺の建物は、怪獣とジェット機の闘いの格好の背景である東京タワーともども、およそ映像によつてそれが破壊された建造物の双璧であるにちがいない。怪獣のみならず、それと闘うウルトラマンやミラーマンもまた、都市破壊の当事者だった。彼らの巨大な足が踏みつぶす情景の効果을あげるためだろう、ビルディングの谷間にはいかにも日本的な資材・様式の、それこそマッチ箱さながらの民家があつて、人々が逃げまどつた後、民家は踏みつぶされ火災を發するのだった。

16 そのように都市破壊が繰り返される光景を見ながら、ついにぼくのオブセッションになりおおせたのは、この大規模な破壊のあと、都市を再建することがいかに困難でやっかいな大仕事であろうか、というものの思いなのであつた。広島においても長崎においても、原爆後の人間の営為に關して、最も感銘深いのは、<sup>⑮</sup>そこでも人々がいかに彼自身を再建し、都市を再建していつたかの現実的細部にほかならない。

17 ぼくは怪獣映画のフィルムが連行しているブラウン管の前に自分と並んですわつてゐる幼児たちの顔を幾たびのぞき込んだことだつたらう。この破壊された大都市の再建をどうすればいいのかと、幼児もまた心を痛めているのではないかと思つて。「○」、「おそろくは当然のことながら、<sup>⑯</sup>幼児たちはそういうことを氣にかけていはしなかつた。東京タワーが幾たび破壊され、東京港の巨大なビルディングがたたき倒され、江東区の民家が踏みにじられても、幼児たちは無感動だつた。やがてウルトラマンが怪獣をねじ伏せ、そいつを緑色のドロドロの塊に変えてしまうのだから。「P」

「映画の最後のシーンは常に、沈黙したまま宇宙へ帰るウルトラマンの英姿であり、それを見送る民衆のうちから、自分の家を壊された不満を訴える声などは、金輪際あらわれてこぬのであるから。少なくともぼくは、破壊された都市の整理・再建の光景すら、かすかすの怪獣映画のフィルムにおいて見たことがない。破壊の次のシーンは、ウルトラマ



ンの勝利、宇宙への帰還、次はコマードシヤルだ。次の週たちまち再建された東京へ、新種の怪獣が攻め入ってくる。□□

「、破壊のさわみの都市、ウルトラマンの勝利、宇宙への帰還、歎呼して送る民衆……

18

怪獣映画を造る大人たちが、これは明らかに十分意識によってコントロールされた方法論によって、そのフィルムに与えているのは、場面転換の論理である。ゆっくりつなげながら持続的に論理を展開してゆくと、どうしても都合の悪い、単純に整理しがたい現実が頭をもたげてくる。その論理の進め手に対してそれ自体が自己否定を迫るような新局面が、論理のつながりのうえであらわれてこないわけにゆかない。リアリズムは、芸術家にそのような自己否定を契機にして、より大きい芸術家へと自分をつくりかえしめるところの方法であった。もしリアリズムによる怪獣映画がありうるとすれば、それはまず科学の愚、科学のもたらした人間的悲惨をも担い込んでいるウルトラマンこそを描き出さずにはおかなかつただらう。テレビ会社の経営者やスポンサーの経営者には、当然ながら、子どもじみた冗談を言うな、と一蹴されるにしても。□「 現実の怪獣映画は、都市の大破壊の後ただ説明も何も無い場面転換ですべてを水に流すことによって、ウルトラマン的超科学スターを聖化し続けているのである。

